

ベートーヴェン交響曲全曲演奏会 第1回

日本テレマン協会創立 45 周年記念の企画で、指揮は主宰者の延原武春、いわゆるオリジナル楽器によるテレマン室内管弦楽団によって、交響曲第 1 番と第 3 番「英雄」が演奏された。その上テンポは、ベートーヴェン自身の示した、メトロノーム記号にしたがったもので、いわば最もオーセンティックなスタイルを打ち出した演奏である。

だが実際の演奏は、そうした新機軸や能書きを意識するまでもなく、延原の解釈は迷いも揺るぎもなく、確信に満ちたもので、その内容は極めて高いと感じられた。第 1 番は澁刺としたテンポ感が快く、まさにベートーヴェンの青春譜になっていた。「英雄」も第 1 楽章の第 1 主題と、第 2 主題のブリッジ・パッセージが、決して宙に浮くこともなく、しっかりと繋がって聴かれたのは、延原がスコアの隅々まで掌握していることの証しだったといえる。

オーケストラの弦楽部は 6 - 6 - 5 - 5 - 3 という編成だったが、かつての同窓生までも刈り集めての臨時編成で、アンサンブルがときおりずれたり、乱れたりという部分も散見されたが、それが即致命傷にならなかったのは、延原のコントロールが、強力に行き届いていたからにほかならない。また管楽器もホルンはナチュラル、トランペットもヴァルブのないストレート管で、困難な奏法をそれなりにマスターして、乗り切ったメンバーの力量も買いたい。「英雄」第 3 楽章のトリオでの、ホルンは立派だったと思う。今回の演奏に接した限りでは、オリジナル楽器使用とか、作曲者のテンポの遵守といった配慮を抜きにしても、普通の演奏会として実に説得力の大きな出来だったと評価されよう。特に指揮者延原武春の実力に、改めて見直しを迫られた思いがする。これなら次回からが、大いに期待されるところだろう。(3 月 31 日・いずみホール)